

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

テキストの表記について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1028

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



テキストの表記について

アドニ『教理問答』モスクワ大学本は活字テキストと二種類の筆跡による補完テキストによって構成されている。いずれのテキストもキリル文字で書かれているのであるが、活字テキストと手書きのテキストとのあいだの正書法には部分的に大きな違いがある。このため以下に述べる原則にもとづいてテキストを転写した。

1. アルファベット

スコリーナ風の活字は東スラヴ地域で最も古いものである。いくつかの文字素(grapheme)には一つ以上の異形があり、それらがほぼ規則的に区別されている場合と、そうでない場合とがある。これにたいして補完テキストの方は異形を持った文字素が少なく、その使い分けにもある程度の規則が見て取れる。文字の異形の使い分けの状況はおよそ以下の通りである。

/o/ を表す **О** と **о**、/u/ を表す **ѹ** と **ѹ** (および **ѹ**) は、それぞれ前者が音節の先頭 (語頭および母音字の直後) に現われ、後者が子音字の直後に現われる。しかし、子音の直後で /u/ を表す二文字の使い分けには確実な規則がない。また語頭の /o/ を表す **О** と **Ѡ** についても、後者が接頭辞 o- のために使用される頻度が高いという傾向があるので、決定的な区別はなされていない。そして /o/ と /u/ を表す文字素の異形にかかわるこのような使い分けの状況は、補完テキストにもほぼ共通している。

/ja/ を表す **ꙗ** と **ꙅ** の間にも上に似た関係が見られる。なお、第一の筆跡の補完テキストにはこれらに対応する **ꙗ'** と **ꙅ** 以外に、さらにもう一つ **ꙅ** が子音直後の異形として使用されている。

/e/ にも二つの文字がある。純粹な東スラヴ語の語形においてこの音素が音節の先頭に立つことはなく、語頭および母音の直後で /je/ となる。この /je/

を表す **Ѐ** と子音直後で /e/ を表す **Ӭ** は上述の /u/ や /o/ を表す文字の場合と同じく相補分布を呈しているのであるが、活字テキストでは補完テキストに比べて例外がかなり多く見られる。

次に、活字テキストには語中の位置による区別なしに適当に使い分けられている異字形がある。例えば、/a/ を表す **Ӑ** と **Ӓ**、/v/ および /w/ (または /u/) を表す **Ӗ** と **Ҫ**、/r/ を表す **Ӗ** と **Ҫ**、そして /t/ を表す **Ҭ** と **Ӎ** などがこれに該当する。正確な理由はよくわからないが、スコリーナの活字印刷でも事態は同じであって、活字ゆえの物質的・財政的な制限、組版を行いやすくするという目的、あるいは美的な観点からこうした状況が生み出されたと思われる。一方、補完テキストは手書きであるのでこれらの文字素については異形が原則として存在しない。唯一 **Ӗ** と **Ҫ** (ともに第一の筆跡) が異形として認められる。

そこで、転写に際しては上述の異形をそれぞれの書記素について一つの文字形式に統一することとし、現代ロシア語アルファベットを採用した。従って、位置によって綴の異なる /o/, /u/, /ja/ は常に o, y, я で表し、/je/ と /e/ は e に一元化される。これら以外の文字についても起源を同じくする現代ロシア語アルファベットに置き換えられる。

ただし、若干の特例が存在している。これらは音韻論的に等価の文字であるが、数値を表す時と、外来語を表記するときに限って区別されるべき文字である。具体的には、и と і と ѵ (/i/), Ӧ と Ӫ (/f/), ӟ と ӫ (/z/) がこれにあたる。また、出現例が少ないが数字として使用される Ӯ (=60) と Ӱ も残した。⁽¹²⁾ さらに、数値とは関係ないがおそらく e (あるいは и) と音韻論的区別がすでに解消されていたと思われる ゝ も形態研究のためには重要な区別であるので再現することにした。結局のところ、1918年の文字改革以前のロシア語アルファベットとほぼ同じ状態である。

(12) Ӱ は数字 (=700) としては使われておらず、Ӱалм-Ӱалом-「詩篇」のみに現われる。

2. 省略表記

われわれが使用したテキストにはいくつかの省略表記が認められる。これらは以下のように転写する。

- (1) 省略記号（“ти́тло”）によって略記された語形は省かれた部分を補わずにそのまま表記し、記号が付けられている場合はそれも再現する。例：
Гла́льъ → гла́ль.

- (2) 省略された文字の一部が行の上に書かれた語形についても補完はしないが、行の上に書かれた文字に限って本来あるべき場所に括弧付で挿入する。

ただし、記号は再現しない。例：г(с)ду, е(ст), ю(т), яки(м), Чого(ж).

- (3) 活字テキストに頻繁に現われる ‘’ は連続する子音文字の間か語形の末尾の子音字に付けられて文字 ъ または ъ を表している。⁽¹³⁾ また母音文字の後ろに書かれているときには半母音の /j/(и)を表す。手書きの補完テキストでこの記号に対応しているのは記号 ” ” である。転写に際してはこれを “ ” に統一した。例： к’амъ → к амъ.

3. 句読点と大文字

活字テキストと補完テキストにはともに句読点としてピリオド、コンマ、コロン、セミコロンが使用されている。さらに活字テキストには段落末に記号が使われることがある。しかし、この記号は段落末の行に一語形しかない場合に余白を埋めるために使用されているようなので、転写に際しては再現しない。その他の句読点の扱いは以下の通りである。

- (1) ピリオドは文または節の区切り、コンマは文成分の区切りとなっている。これらについては基本的にテキストに書かれた通りに再現する。しかし、

(13) 連続する子音文字間には語源に関係なく挿入されていることがある。

手書きの補完テキストではいずれの句読点かの判断が困難なことがあり、活字テキストにおいてもスコリーナの印刷ほど規則的に使い分けが行われていない。このため若干の箇所では文脈を考慮にいれて修正を加えた。

- (2) コロンは意味上の関連性を持った一つ以上の文を区切るために使われている。したがって、現在欧文で使用されているコロンよりも、セミコロンに機能の上では近いのであるが、やはりそのまま再現することにした。
- (3) セミコロンは疑問符として機能しているので記号「?」で再現する。しかし、補完テキストではときにセミコロンが上述のコロンの機能を持っていることがあるので、その場合にはコロンに修正した。

活字テキストでも補完テキストでも段落および文は大文字で始めるのを原則としているのであるが、それほど一貫性を持っているわけではない。このため、一応ピリオドを文および段落の区切りとみなして、適宜大文字を使用した。

文中に現われる固有名詞や神聖な概念も大文字で始まることが多いが、これらにかんしては小文字で始まっていても修正を加えていない。逆に、かなりの頻度で大きい字形で書かれる文字もあるので、これらは文脈を判断した上で小文字に修正している。

4. 単語の分書き

われわれのテキストにはすでに分書きが採用されている。しかし、現代の欧文と違って、一音節の接続詞（и а 等）や前置詞（о в(ъ) к(ъ) с(ъ) 等）のような後接的要素は後続の語形との間に空白が入れられず、一音節の前接的要素（ся бы жь же）は先行する語形と結合されることが多い。

5. 転写テキストの構成

転写テキストは図5に示されたように三つのコラムから成り立っている。

第1コラム

第2コラム

第3コラム

Девятый грѣхъ сомнитися в недовѣрѣ
 8 блгодати бжїей. или помышляти <я>||ко бы
 богъ о насъ не дбалъ, и о(т)пустити намъ
 грѣхов не хотѣль. Таковъ былъ Кайн, Быт: ۢ
 которыи вѣрити не хотѣль абы ему бгъ
 о(т)пустити мѣль, иже брата своего убитль.
 Тоє же и о Іудѣ котороии Христа продалъ Мат: ۢ
 розумѣти маешь.

図5：テキスト例

第1コラムには原文の各葉表に書かれたページ番号を記す。実際にテキストにページ番号が書かれていらない場合は数字を括弧に入れる。数字の後に‘v’(verso)が添えられているのは裏面であることを意味している。また、数字の前にアスタリスクが一つ付いていれば第一の筆跡による補完テキストであり、二つ付いていれば第二の筆跡による補完テキストである。

第2コラムは『教理問答』の本文である。記号||は各葉の表裏の境界を示している。括弧<>で囲まれた文字・記号・句読点は本来テキストに欠けていたものを補ったことを意味している。また、括弧[]で囲まれた部分は判読が困難であった箇所である。汚損や欠損のためまったく判読できなかった箇所は[**]としている(およそアスタリスクの数に相当する文字が判読不可能)。なお、明らかに誤植または誤記を含んでいると思われる語形は正しい形式を脚注に示した。

第3コラムは原文に傍注として書かれている旧・新約聖書の対応箇所である。旧約聖書については書名と章、新約聖書については зачало がキリル文字の数字で示されている。キリル文字の数字だけが書かれていれば、それは箇条書の番号である。

(岡本崇男)